

メッセージアウトライン

ローマ 4 : 13~25 「アブラハムの信仰にならう」

[13-16]世界の相続人となる約束がアブラハムに、またその子孫に与えられたのは律法ではなく信仰による義であった。律法を守り行おうとすることによっては神に義と認められることはできない。律法は人間を救うというよりも、むしろ人間に対する神の怒りを明らかにする。律法を守ろうとしても守れないことによって人間の罪は明らかになり、その結果として神の怒りを招くのである。そのようなわけで世界の相続人となることは律法を行うことではかなわず、ただ信仰により、神の一方的な恵みによるのである。

「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした」は創世記17:5からの引用。

このようにアブラハムに与えられた約束はすべての人々に、すなわち律法を持っているユダヤ人だけではなく、アブラハムの信仰にならうすべての人々に保証される。

[17-18]アブラハムは神を「死者を生かし、無いものを有るものようにお呼びになる方」として信じた。つまり、死者を生き返らせ、まだ影も形もない存在していない子孫をあたかも存在しているかのように言われる神を信じたのである。この時アブラハムは老人であり妻のサラは不妊の女であった。このような状況で彼は「望みえないときに望みを抱いて信じ」た。それは彼が彼の信仰にならう「あらゆる国の人々の父となるため」であった。「あなたの子孫はこのようになる」は創世記15:5の引用。

[19]この時アブラハムはおよそ百歳、妻サラは九十歳であった。→創世記17:17

とうてい子どもが生まれるような状況ではない。しかし彼の信仰は弱らなかった。

[20-22]「彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」

アブラハムは周りの状況からものごとを判断したのではなく、約束されたことを成就する力のある神を堅く信じた。そして神はそれを彼の義と認めてくださったのである。

[23-25]「しかし、『彼の義とみなされた』と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」

信仰によって義と認められること、それに基づく祝福と約束、また復活の信仰→ヘブル11:17~19、これらアブラハムにおいて現実であったことはまたキリスト者においても同様なのである。主イエス・キリストが私たちの罪の身代わりとなって十字架で死なれたこと、そして葬られて三日目によみがえられたことを私たちは信じる。私たちもアブラハムと同様にこの信仰によって救われるのである。

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるためによみがえられた。この事実を信仰によって堅くつかんで、私たちもアブラハムにならって主に従い続けよう。